

世界中の文化が輝き、溢れ、交流する「場」をめざして

—— 文化のプラットフォームとしての日本 ——

21世紀の日本は、どのような国として、この地球上に在り続けようとするのか。私たちは「文化のプラットフォーム」という言葉をキーワードに掲げ、日本のとるべき道、めざすべき姿を提言する。

その心は、列車が到着するたびにさまざまな人が降り立ち、また列車に乗る人々や、見送り、出迎えの人々がやってきて、しばし時間と空間を共有し、そこからまた、人生の次のステップに旅立っていく——そのような、誰にも開かれた交流の場としての日本を創出することにある。否、新たに創出するのではなく、日本がもともと歴史的に持っていた、文化の交流空間としての特性を見直し、あらためて自らの強みとし、意識的に育てていこうというのである。

ユーラシア大陸と太平洋に挟まれた、地球上のこの位置にあって、日本社会は、各時代における文化の交流の結果として形成され、成り立ってきた。そうしたありのままの強みに即して、これからの国際社会の中で日本が一つの意義ある役割を果たしていこうとするとき、そのイメージを最もよく表現する言葉として私たちが選んだのが、「文化のプラットフォーム」である。

「文化のプラットフォーム」とは

英語の **platform** には、台や壇などの一段高くなった場所を指す広い意味がある。しかし、ここで私たちが使う「プラットフォーム」は、すでに日本語の一部となった、鉄道駅のプラットフォームのことである（したがって「プラットフォーム」ではなく「プラットフォーム」と表記する）。

1. プラットホームは、それぞれの荷物を背負ったいろいろな人が出たり入ったりする場所であり、そこで人々が出会うことによって、さまざまなことが起こる。すでに日本にいる人々を含め、世界の人々が出会うプラットフォームとしての日本では、つねに文化の化学反応が起き、新しい価値観が生まれていく。
2. 何らかの空間に出入りするとき、人は必然的に何かを持ち込み、有形無形の何かを得て出ていく。プラットフォームとしての日本にひっきりなしにやってくる人々が運び入れるものが、日本に長く暮らす人々の文化を豊かにし続け、また、旅立っていく人々が、この日本の風土に育まれた文化の何らかの側面を、自ずと世界に伝え続けることになる。
3. こうしたプラットフォームを提供しようとする自体が、人と人とのつながりを社会生活の基盤と考える日本の文化を、一つの国際貢献として世界に示すことになるであろう。これは、西洋文明が生み出してきた社会・文化装置のあり方に追いつくことをめざす発想とは、大きく異なった前提に立つものである。

総じて、プラットフォームとは、さまざまな人が何らかの目的をもって足を踏み入れ、少しの間立ち止まり、また旅立っていく場所である。世界の人々のプラットフォームとしての日本では、何者も拒まれることなく、自らの文化について、自らの文化の文脈で、語る事ができる。

- 社会基盤としての文化 -

19世紀半ばに開国した日本は、その後、非西洋の国家としていち早く近代化を成し遂げた。なぜそれが可能となったのか、その理由を知りたいという声は西洋でも非西洋でも、いまなお根強い。その問いに答える鍵は、日本が歴史的に育んできた、文化的基盤の中にこそ見出しうるように思われる。

日本が社会の大転換を経験した明治維新期において、文化は、経済や軍事のあり方をも含む、総合的な日本の行く末にかかわる問題として、政治の基軸に据えられていたとすることができる。「欧化」としての近代化を推し進める中で、それ以前の文化を置き去りにした弊害も否定することはできないが、そのことも含めて、国づくりとは、つねに文化の問題であった。そして、日本の急激な近代化を可能にしたのは、一見、軽んじられたかに見える、江戸時代までに蓄積された文化の力にほかならないであろう。

経済の面から見れば、第二次大戦後、日本はたしかに世界の「経済大国」としての地位を謳歌するに至った。しかしそこから、文化の観点は抜け落ちてしまったのではないか。その結果、経済が低迷したとき、人々がその中で生き抜く術を失い、社会が拭いようのない不安と混乱に覆われることは、日本が今、直面している現実である。一方、軍事力のみを優先する考え方は、多くの犠牲以外に何も生み出さないことを、まさに多くの犠牲とともに学んだ。

経済力も軍事力も、そのみでは、けっして最後の砦にはなりえない。私たちは、人々の幸福と平和を根底的なところで支えるのが文化であるとの原点に立ち戻り、そこから、21世紀の日本が向かうべき方向を提案する。

ここで私たちは「文化」という言葉を、狭義の芸術表現や創作活動のみをさすのではなく、いかなる環境下においても、人の社会があるかぎりそこに存在するはずの、各地の風土に根ざした人間の生活様式や価値観、互いの関係の結び結び方などを含む、広い意味において使っている。いわゆる芸術とは、そうした広義の文化が研ぎ澄まされ、抽象化、様式化された形であると考えることができる。

- 文化の底力 -

日本はその歴史を通じて、つねに新しい文化を取り入れてきた。しかし、この列島の社会それ自体が根底的に途切れることは一度もなかった。日本文化の特徴とは、類い稀なほどの柔軟さをもって、多くの文化との絶えざる交流のうちに織り上げられてきた過程それ自体であり、それを支えてきた文化的好奇心に求められると言ってもよいであろう。

こうした文化の観点から日本の社会を見直すとき、そこには、底力とも言うべき豊かさを見出すことができる。それは、地球上で最大の陸地と最大の海が会うところに位置する列島として、各時代の人間の移動がもたらした限りの多彩な文化を受容し、大胆に既存の文化と融合させながら、この列島ならではの環境の中で咀嚼し、発展させ、自らのものとして生きてきた人々の持つ強さである。

日本の越し方についてそのような意識を持ち、文化交流の国としての自覚を現代日本の中心に据えること、これからもそうした交流が繰り返され、さらに広く、世界中の文化を迎える舞台であり

続けることこそ、私たちが「文化のプラットフォーム」という言葉で表現する、21世紀の日本の姿である。

- 世界の諸文化の交流の「場」としての日本を創出すること -

世界の「文化のプラットフォーム」になるとは、日本が世界中の文化を受容し続け、それによって自らの豊かさを維持するだけでなく、ここで世界の文化が出会い、互いの交流を通じて新たなものが創造されていくための機会を提供することであり、さらに、そうした交流を尊ぶ価値観を、自らの行動を通じて世界に伝えることでもある。それこそは、日本が歴史的な経験に立脚し、いまだ多くの国に勝る自らの経済力をもって、国際社会に貢献する最もふさわしい道ではないか。そのような意味において、私たちは、「世界の諸文化の交流の『場』として日本を創出すること」を提案する。

これは、既存の文化政策をはじめ、教育、外交、その他さまざまな個別の政策領域を超えて、広い意味での文化の観点から、これからの日本社会を構築しようとする総合的な試みである。そのことが同時に、世界中のさまざまな文化を背負う個々人が、充実した生を全うしながら互いを思いやり、本当の意味で平和に共存していくための価値観を育むことになるのであれば、日本が現代の国際社会で果たしうる、まことに誇りある役割であり、日本らしい成熟の示し方ではないだろうか。

本提言は、日本がそのような開かれた文化の国として在り続けることを明確な目標に掲げ、その実践によって国際社会における揺るぎない立ち位置を確保することをめざす、新しい文化戦略である。